



『シンセミア（上・下）』阿部和重著／講談社
文庫／上・943円＋税 下・971円＋税



魅力的な悪役ほど 悪ではない

阿部和重
(作家)

山形県じんまちの神町を舞台にした小説『シンセミア』には数多くの犯罪者が登場するが、作者の阿部和重は悪のイメージでキャラクターを描いたつもりはなかったという。そして逆に問う、悪人とは何か、と。善悪をはじめとする二項対立問題について、デビュー作から向き合ってきた芥川賞作家が、はじめて「悪」について語った。

以前にも他誌から『シンセミア』（二〇〇三年）は悪を書いているから、悪について話してほしい」という趣旨の取材の依頼がありました。それは断ったんです。というのも、作者本人としては必ずしも悪を書いたつもりはなかったからです。今回ご依頼いただいたときにそのことを思い出し、自分なりの考えをお話しておいたほうがいいかなと思ひ、お引き受けしまし

た。『シンセミア』は、悪を書こうという発想から出てきた小説ではありませんし、書いているあいだもそのことは頭にありませんでした。なので、悪というテーマについての取材依頼が二度もきたことを意外に思っています。『シンセミア』の発売直後に受けたインタビュアーでは、ノワールという言葉は使っています。ジャンルとしてのノワールとマジック・リアリズムというスタイルを融合させれば新しい小説が生まれるのではないかと考えて書いたのが『シンセミア』だからです。

善悪の二項対立

ノワールを意図しているので、法律を犯す人たちはたくさん出てきます。犯罪者は一般に悪い人と見られているので、その意味では『シンセミア』も悪を書いていると言えないことはない。でも、はじめから悪なる概念ありきで、それを主軸にすえてキャラクターやエピソードを組み立てようという考えは特にありませんでした。

そもそもこの二二世紀においては、悪だの善だのといったレッテルのみで描かれるキャラクターなど、なんの存在意義もないような気がします。善だの悪だのだけで書かれるお話は中世で終わっていると言えるのではないのでしょうか。それでもこの世に善悪という区別があるのは、そのほうが現実の一面を明快に説明しやすいという便宜上の理由からであって、行為としての善行や悪行はもろろあるにしても、善だの悪だのが不変の個体として存在し、通りを歩いているからではない。そういうわけで、創作の場で善悪をテーマに世界を書こう、登場人物を描こうという考えはまったく持ってこなかった。自分自身としてはそれよりも、善悪にかぎらない二項対立の状況そのものに強い関心があっ

た。人は二項対立の構図のなかで世界を捉えたとがるという認識を持っているのですが、もちろんそれもまた、そのほうがこの流動的な現実の一面を明快に説明しやすいからじゃないかと思っています。いずれにせよ、この世に存在するあまたの物語もたいてい二項対立ベースできている。恋愛ドラマだってそれに含まれる。だからこそ、そうした構図そのものを物語化するような試みに僕自身はこだわってきていて、それはデビュー作の『アメリカの夜』（一九九四年）から『シンセミア』、さらに新作の『オーガ（二）ズム』（二〇一九年）までいちは貫かれています。

だからどうしても、『シンセミア』に出てくる連中が法を犯すからといって即「悪を書いた」と見られるのは、作者としては違和感を覚えないでもない。今どき悪一色として存在する「純文学」の作中人物って許されるのか、とも思っちゃう。もちろん、あえて悪一色の人物を登場させる戦略的な書き方は可能だし、そのような創作の実践にも意味はあると思いますが、自分が『シンセミア』で書こうとしたのはそういうものではなかった。どちらかというと、各個人の抱えるさまざまな欲望のぶつかりあいとして生ずるドラマを描こうとしたのがあの小説で、そ